



▽犬飼さんからの六つの質問

高山 今回、犬飼さんは独自の質問を持ってこられたそうですので、そこからスタートすることにしてしましよう。

犬飼 四つ、五つあります。先ず一点目。先生は鈴鹿の講演で、最近、「凜」という字を使う歌が多い。新聞短歌に「凜」が来たら落とすとおっしゃいましたが、第一歌集『群黎』で、〈君の母を犯せる夢にまだろめば青年の君凜と立ちいつ〉がありまし

た。あのころの〈凜〉はまだ手垢がついていなかったことばですね。

幸綱 五十年ぐらい前の話だなあ。

犬飼 もし、今、新聞投稿歌でこれが来たらどうされますか。手垢がついているから落とす？

幸綱 うーん、今ならね。

犬飼 二点目。十二月号で坂口弘さんが、先生から柳瀬尚紀の『日本語は天才である』という本を送られて、読んでいるという記事を見ました、坂口にこの本を送られた意図は何でしょうか。

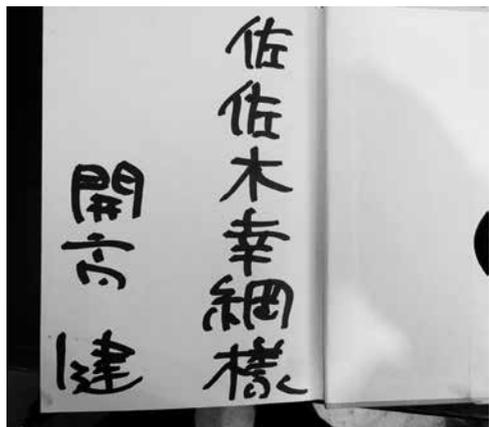
幸綱 選んだのは彼女(佐佐木朋子さん)だ。

高山 じゃ、朋子さん、ちよつとお話をしていただけですか。

朋子 坂口さんの読書範囲みたいなものじゃないところを、つまり短歌とか思想の本ではないジャンルのをちよつと読んでもらいたいなと思つて、ときどき送つてます。その中の一つに、柳瀬さんのがあつたということです。

犬飼 坂口さんと十亀(弘史)さんは新聞は読めるんですか。

幸綱 よくは知らないけど、一応チェックされて、都合の悪い部分は墨で消されてい



るときいたけど。

加古 一般の記事は読めます。

朋子 書籍の差し入れはかなり自由にできるんです。

犬飼 三点目です。「心の花」十二月号の「今月の十五首」で、先生は山崎波浪さんが詠んだ開高健のお墓の歌を選んでおられますが、その寸評で、先生が「文芸」編集長時代は開高健と毎月のように旅をして食べた飲んだりしたとありますが、開高さんと